

Title	言語文化学 Vol.12 編集後記
Author(s)	高岡, 幸一
Citation	大阪大学言語文化学. 12 p.291-p.291
Issue Date	2003-03-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77968
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編集後記

本号は、前年号に載せるべくして果たせなかった残留組の投稿者も殺到したせいか多数の応募者があり、第10号と同じく19篇の論文が集まった。当然、目次を一覧して明らかなように、題目から窺われる研究テーマの範囲の広がりには文字通り多種多様な領域に渡っている。「言語文化学」の守備範囲の広大さは一目瞭然であろう。あとは各論文の質のレベルが問われるところであるが、査読制をも経てこれだけの成果を公表した以上、今後は「自己評価」(?)や「外部評価」(?)のチェックを受け、益々完成度の高い研究誌にしていける努力が必要であろう。

一つ気になる点は、今回も教官側からの投稿が見られなかったことである。これにはいくつかの理由があるかもしれない。最近、教官と院生との共同研究プロジェクトの企画も盛んであり、研究発表の場も多くなっている。ただ、本言語文化学会の機関誌であるこの学会誌の創刊の主旨からしても、院生と教官が連携してその学術的レベルを向上させてゆく必要があろう。さらに、このことは年2回行われる言語文化学会における研究発表会での教官の参加についても同様である。発表に関しては院生が優先されるかもしれないが、少なくとも研究会を活発にするためにより多くの教官の参加も望まれるところである。

したがって、より良き言文学会の発展のためには教官側のイニシアチブが是非とも不可欠である。そのほか、組織的には査読制の内部での細目に関わる問題点もあるかもしれない。試行錯誤を通して組織面での枠組み作りも今後の課題となろう。とにかく、第12号は、委員の先生方や院生諸君、査読の先生方や研究会の司会の先生方、そして何よりも精力的に事務作業を担当して頂いた伊賀上助手のおかげでここに上梓の運びに至ったことはひとまず喜ばしいことである。

2003年3月

編集委員会（高岡幸一）